

もくじ 文淵筆「恵比寿天図」と恵比寿講 1P 千住掃部宿の「旧書留」から② 2P
アラサーみゅーじあむモノがたり・後期 4P

足立史談

第587号

2017年1月15日

足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562
(28-308)

文淵筆「恵比寿天図」と恵比寿講

萩原ちとせ

■文淵の恵比寿天図 今回郷土博物館開館三〇周年企画展では、文化遺産調査のなかで、谷文晁や鈴木其一ら文人たちとの交流の詳細が明らかになってきた江北の豪農船津文淵（菜菴）の作品である「恵比寿天図」を紹介している。

これは、京都の古書店から個人が入手した掛軸で現在、当館に寄贈された。箱もなく伝来の背景は全く不明である。

文淵筆の恵比寿天図ということ、恵比寿天図が掛けられる状況を整理し、その制作と使用の背景を考えてみる。

恵比寿天は釣り竿、鯛を携えるこ

とから、漁業、豊漁を司り、豊穰、財徳を司る大黒天とともに商売繁盛の神でもある。

■恵比寿講 恵比寿天の図が掛けられるのは、恵比寿講というおもに十月もしくは十一月二〇日の恵比寿天・大黒天を祭り、五穀豊穰・大漁・商売繁盛を祈る行事の際である。地域によっては、一月の二〇日と春秋二回祭を行うところもあり、それぞれを農家の豊作、商家の繁盛を祈る祭りと分けて考えたり、循環性を持たせて、春には祈願をし、秋にはそのお礼をするところもある。

恵比寿講は全国的に広がっているが、足立区周辺では、秋に行われ、この日は神棚に祀っている恵比寿・大黒像を下して床の間や小机などに



恵比寿・大黒像 14cm × 12cm
このような像や専用の宮に祀ったものを、神棚から下し、その日一晩お祭りする。(当館蔵)

改めて祭る。そして高盛飯や煮物、お神酒などの御馳走を供える。お頭付きの生魚を供えるといい、一般には鯛を示す言葉であるが、鯛の調達に難しいからか、頭があればよいということでもサンマでも可能であった。

生きた鯛を器ごと供え、翌日川へ放つという特徴的な儀礼が、足立区、葛飾区、八潮市、幸手市などで記録されており、この習俗は江戸川、荒川など河川下流域の平野部にあるようである。また、財福を得るための願いを込めて一升枥に銭を入れて供える。

足立区周辺の農村部では、通常は神棚に祀っている恵比寿・大黒の像や神札を対象として恵比寿講を行っており、掛け軸を取り出して飾るといふ習俗は一般の農家では見られない。また、恵比寿天・大黒天の双方を祭る。



船津文淵「恵比寿天図」
絹本淡彩軸装

文測の恵比寿天図は、比較的簡素な軸装ながら絹本である。掛け軸の裏、巻緒がかかる上巻の部分は擦れていて、かなり使い込まれた様子が見られる。表具師の勝村真光氏によると、江戸末・明治頃の表装であろうというお話しである。

この恵比寿天図は、神札などで知られる鯛を小脇に抱えて釣り竿を持つて座る姿とは異なり、満面の笑みを浮かべて大鯛を掲げる躍動感あふれる独自の図柄である。神像としての信仰対象の恵比寿天図より、妙味にあふれ、掛け物として充分観賞できる絵となっている。

■**恵比寿天図の註文** 文測は、天保三年から十年（一八三二～三九）まで、自分に依頼された絵の「註文簿」を残しているが、この間のなかで該当しそうなものは、天保九年十月十六日の「一、立物キヌ エビス 鳩ヶ谷 誹連中」と天保十年六月二十二日の「一、エビスの図 立物 きぬ 角右衛門江 竹沢六郎兵衛」の二点である。ひとつは、鳩ヶ谷の俳諧連中へ、もうひとつは、贈答用の注文であろうか、角右衛門は、不詳ながら文測の日記（註）によく登場する人物である。

今回紹介した恵比寿天図との関連は不明であり、参考とするには大変少ない事例であるが、恵比寿天・大黒天を双幅として制作せず、恵比寿

天のみの作画もされていることや、足立区周辺の農家の恵比寿・大黒天像を祭る習俗から見ても文測が恵比寿天図を描くのは、農家の恵比寿講の祭祀用に向けて描いたのではなく、「恵比寿講の季節」を彩る掛け物として詠えられるもので、実際に長い年月そうして使用されてきたものと想像する。

■**二十日恵比寿** 江戸では、十月に商家の恵比寿講が大きく行われていたが、京都でも、十月に「二十日えびす」といい、恵比寿神社（京都市東山区）の大祭もあり、福笹などの縁起物の授与などが行われる。この日、人々はおきまりの行事食として、笹にみたてたネギと、小判にみたてた丸いあんべい（はんぺん）の汁を食べた。また、京都、大阪を始め関西では、十日えびすといい、大きな神社を中心に一月の一日に祭りが行われ、大勢の参拝客を集めている。都市の行事として商売繁盛の願が濃く、また、大黒天より恵比寿天が重視されている。

■**伝来経路** 美術資料を古書店が入手する手立てはさまざまのため、京都の古書店で発見されても、京都にこの軸が伝来していたと限定することはできない。近年、古書市などを契機に関東から流れていったことも充分考えられる。しかし、その時期はともかく、関西での発見は、恵比

寿天図の需要が大きい土地であることとの関連が想像できる。

文測は、文化十三（一八一六）年に関屋里元らと伊勢神宮へ参拝し、逗留先で画賛を作つて宿の主人に贈つたり、求められて宿の袋戸棚、その他の画を認めるなどしている。（『文政十三年 寅三月七日勢州 道の記 葉葎蔵』）神宮参詣の旅で、充分に画や詩などを愉しみ、逗留先と交流を持った様子が想像できる。

また、「文測 覚ガキ」という横帳は、弘化四（一八四七）年ころ、京都、奈良に出かけ古社寺の絵画や宝物を観察した形跡が記されている。表紙が別筆で、丁には切り取りや空欄があり、内容もひとつではないため精査が必要な資料ではあるが、場合によっては、そのような機会に、作画を残したことも考えてみることができるといえる。

■**生活文化を物語る** 文化遺産調査によって明らかになった船津文測のさまざまな資料は、長い年月の間に切り離されてしまふ、作品と作者、作画の背景を結びつけることのできる可能性を生んだ。今後研究が深まり、美術史上の大きな発見もあることは間違いない。

そして、現在、貴重な美術品として珍重されがちな資料が、人々の暮らしの道具として、どのように使用され、愉しまれていたのかを示す大

きな手掛かりを示している。

（註）文測は嘉永二（一八四二）年から安政三（一八五六）年まで、日記を残している。詳しくは山崎尚之「文測の日記について」足立区立郷土博物館特別展図録「美と知性の宝庫 足立」を参照。

（郷土博物館学芸員）

千住掃部宿の「旧書留」から②

掃部堤と千住大橋

多田 文夫

前回の掲載資料についての解題を紙幅の都合で本号に掲載する。

■解題3 「旧考録」との異同

千住二丁目の町役人だった永野家が幕末期に記述した「旧考録」にも、掃部新田、橋戸、河原の成立記事がある。そこでは元和二（一六一六～一七）年頃、掃部新田に二八軒の草切り百姓がおり、うち八軒が橋戸にいたと記している。

百姓の軒数は石出家文書「旧書留」と同じであるが、年代では同書の寛永十七（一六四〇）年とするのに対して「旧考録」では二三～四年遡るといふ差異がある。とくに獵師を百姓に取り立てたという記述は「旧考録」では見出せない。傍証資料を欠くため、いずれの記述が正しいかは判別できない。

ただし「旧書留」の記述は、田畑や屋敷の反別が具体的に記述されており、なんらかの土地台帳（検地帳など）を参照していることが類推できること、二八軒の百姓名を記載するなど具体的であることから、比較的詳細であり、手元資料を参照して記述しているとおぼしい。

永野家の「旧考録」も地元である千住二丁目と周辺の記述は詳細で、手元資料を参照しながら記述したと考えられる。

つまり石出家の「旧書留」も永野家の「旧考録」も、それぞれ作成者の町や家の記録としての性格が強いことが見えてくる。

* * *

ここから、再度、資料釈文を中心に見ていこう。「旧書留」の記述は、続いて掃部堤（現墨堤通り）の築造と千住大橋の架橋の記述に進む。
※釈文は自分の改行にできるだけ合わせているが、紙面の制限で改行位置はずれている。（一）【一】は筆者による。

■釈文

【①掃部堤】
（1丁裏末尾）

掃部堤

東西長千式拾間
鋪九間半壹尺
馬踏式間四尺
高壹丈貳尺

元和二辰年正月
（2丁表）

御二代様 御成之節、石出掃部奉願蒙 上意、同年四月繩張、同三巳年御筑（築）立出来、

【②千住大橋】

大橋無之船渡二付、文禄三午年迄小塚原村長左衛門船守役相勤候、名主二者無之、是ハ御扶持米被下候由、大橋、文禄三午年御掛ケ渡

御奉行 伊奈備前守様

長六拾六間、中四間

右御橋御修復正保四亥年

御奉行 伊奈半十郎様

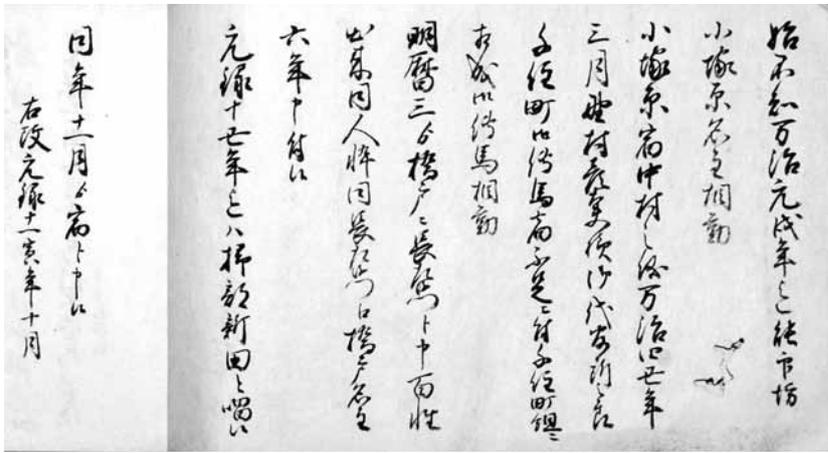
■解題4 掃部堤と千住大橋

掃部堤は、石出掃部介吉胤の名を冠した隅田川左岸堤防である。現在の墨堤通りのうち、京成関屋駅付近から千住龍田町交差点までの約2kmがおおむね該当する。記事中には一〇二〇間の長さとし（一八五五m）現在の実測数値と差があるが、これは起点と終点の差および堤防の蛇行が関係しているとおぼしい。元和二（一六一六）年正月に二代將軍秀忠の上意をうけ、四月には繩張り（現地設計）を済ませ翌年（一六一七）に完成したとする。

千住大橋については文禄三（一五九四）年に伊奈備前守忠次が架橋したこと、正保四（一六四七）年に修

復架け替え工事があり、伊奈半十郎忠治が普請奉行となったと記す。

興味深いのは架橋するまでは「船渡」（渡船）で小塚原村の長左衛門が「船守役」をつとめ扶持米を与えられていたとする記述である。大橋架橋以前は渡船であったとの記事はこれまでも散見するが、具体的に船守役が置かれていたという記述はめずらしい。



「旧記留」2丁裏から3丁表
小塚原・中村記事部分

【③小塚原・中村記事】
（2丁裏）

始不知、万治戊年迄、能印坊小塚原名主相勤、
小塚原宿中村之儀、万治四丑年三月、野村彦太夫様御代官所之節、千住町御伝馬宿不足二付、千住町組二相成、御伝馬相勤、

【④橋戸名主役】

明曆三より橋戸二長左衛門ト申百姓出来、同人倅同長左衛門江橋戸名主六年申付候、

【⑤掃部宿への名称変更】

元禄十丑年迄ハ掃部新田と唱い
（3丁表）
同年十一月より宿と申候

右改、元禄十一寅年十月

■解題5 小塚原・中村・橋戸記事

小塚原については万治年間の戌年「万治元（一六五八）年まで「能印坊」が小塚原の名主を勤めていたと記す。この「能印坊」であるが現荒川区南千住の素盞雄神社の宮司家である能圓坊家を連想させる。石出家の手控であることを考えると、能圓坊家と捉えるのが妥当だろう。

つづいて小塚原宿と中村宿は万治四（一六六一）年三月に千住町組に伝馬宿として千住町組に入ったとの記述がある。永野家文書『旧考録』

では寛文元年に宿組加宿とする。万治四年は四月二十五日に寛文に改元となるので、これまで小塚原と中村の千住加宿はそれ以降と考えられたが、本記事によると万治四年三月となり、若干時期にずれがある。資料の成立時期と性格から本資料の記述に従うのが妥当だろう。：つづく。

※本稿の検討にあたり素盞雄神社文化室学芸員能圓坊貴子氏（荒川区南千住）、荒川区立荒川ふるさと文化館館長野尻かおる氏にご教示をいただいた。紙上より感謝いたします。

（郷土博物館学芸員）

文化遺産調査企画展
アラサー
みゅーじあむ
モノがたり 後期

開館 30 周年
後期展示開催中です！

ただいま開催中の、開館三〇周年企画展では、博物館がこれまで行ってきた調査や収蔵、そして研究についてご紹介しています。前期では、六曲一雙建部巢米筆「吉野山桜竜田川紅葉図屏風」の「竜田川紅葉図」（左

隻）のみ展示していましたが、後期では修復が終了した「吉野山桜図」（右隻）が加わり、万葉集の時代から歌に詠まれてきた美景の二大名所が揃いました。

桜・紅葉の揃った様子をぜひご覧下さい。



三〇年と皆様のご協力

常設展示の模型、チューリップフレームは、太陽光線の取り入れを効果的にできるように工夫した温室栽培施設です。このフレームは西保木間に残るのみで、西保木間の増田精一さんの畑がモデルになっています。また、記録映画「あだちの花づくり」（平成五年）の撮影も増田さんの畑で行いました。

ご協力いただいた増田精一さん（大正十一年生）は、昨年十二月に逝去されましたが、昭和の初めから長男として農家を継ぎ、戦時中は近



常設展示人型写真パネルのための撮影

衛歩兵として皇居の警護にあたりました。また発展途上国へ農業技術指導に行くなど、そのご経験や知識は深く、農業や昔の行事、戦時中のことなど多くのことを教えていただいた方です。博物館の活動にはいつも温かくご協力くださり、さまざまなお願いに応えてくださいました。博物館には寄贈資料のほか、情報

イラスト・マンガ紹介

アラサーみゅーじあむモノがたり展でテーマとしている博物館の活動について、かわいいイラスト・マンガでわかりやすく解説しています。施設見学にやってくる小学生のワークシートに掲載しています。ま

研究 - しるべ -

企画展示期間中は、下町博物館の調査員が、手紙や日記、古い大正の探検家たちの行方を探るために、手紙や日記を調査しています。調査員は、古い大正の探検家たちの行方を探るために、手紙や日記を調査しています。

収集 - あつまる -

博物館には、さまざまな種類の資料が、手紙や日記、古い大正の探検家たちの行方を探るために、手紙や日記を調査しています。

保存 - つたえる -

博物館には、さまざまな種類の資料が、手紙や日記、古い大正の探検家たちの行方を探るために、手紙や日記を調査しています。

提供、講座やイベントでの出演など、これまで多くの方にご協力いただいています。皆様のご協力は博物館の活動の財産であり原動力です。博物館三〇年の歴史と力は、皆様の支援の積み重ねによってつくられています。先人の思いを、未来へ繋げていくように今後も努力いたします。